



陳言コラム-12

中国雑談

見栄は、「バドラー」

日本の記者と一緒にあるニューリッチ取材しに行った。ノックして門を開けてくれた布靴を入った初老の女性に、記者は愛嬌よく「奥さん、こんにちは」と挨拶した。先方はひどく赤面して、筆者も困惑した。これは数年前の話だった。

日本には「阿姨さん」（住み着きお手伝いさん）は、もうすっかり消えただろう。大手新聞の記者はかなり収入が高いそうだが、彼らだって東京では「阿姨さん」を雇っていない。その常識で中国で門を開けてくれる女性は、ニューリッチの奥さんだと思い込んだようだ。

今はおそらく同じ間違いを犯さなくなるだろう。バトラー（執事、個人秘書）がニューリッチの間では流行っている。白い手袋をして、黒い制服を着て、門を開ける人は、ニューリッチご本人であり、あるいはその奥さんと間違えることはもう絶対がない。

白い手袋をするバトラー

中国のニューリッチは、日本の大手企業のサラリーマンよりも少し金を持っていると思われる。ゴルフが大好きで、郊外に二階立ての一軒家もっているところでは、中国のニューリッチと日本のサラリーマンはまったく一緒だが、気持ちやライフスタイルはかなり違う。

このごろ、大人気の英国ドラマ『ダウントン・アビー』や欧州式の豪華な生活など、中国ニューリッチの間では話題となっている。一部のニューリッチも制服に身を包み、白い手袋を手にはめ、素養が高く、よく訓練され、気配りが周到的な従者を抱えたいと思っている。農村から上京し、小さい子供の面倒を見て、なれた中国料理をつくってもらうなどのオールド・スタイルのお手伝いさんには、もう満足できない。

郊外への一軒家を買に行ったとき、モデルルームにいた白い手袋をしたバトラーは、



その一軒家より記憶に焼き付ける。購入者に対して執事サービスを提供している不動産も出ているので、自宅にもバトラーを置きたいという富豪たちの願望を強く刺激されている。

人気上昇中のバトラー養成学校

テンセントは10月7日の報道によると、四川省成都にある中国初のバトラー養成学校から一期生が卒業したとのことだ。ニューリッチにとってはたいへんありがたい話だ。この「国際執事学院」(The International Butler Academy)という国際的なバトラー養成学校で富裕層に対するサービスを学び、三つ揃いのスーツを身につけ、約8週間の課程には靴磨き、デスクの整理整頓、ワインの注ぎ方注ぎなどが織り込まれ、年収は少なくとも3万ポンド(約552万円)に達する。

またAPの報道では、38歳の張哲静氏のケースが出ている。張はかつて山東省の高校で長年英語を教えていたが、ある時、彼女は成都の「国際執事学院」が主宰する執事養成コースに参加したという。

8週間にわたる課程で学生が支払う費用は1万900ポンドで、その費用には制服一式の費用や欧州の豪邸で行われる実地授業の費用、そして訓練期間中の食事代などが含まれている。訓練期間中、教師たちは礼儀作法から高級な旅行の手配まで、執事が西洋式かつ最高水準で富豪の生活を管理するために必要な一切の知識を教授する。アイロン掛けや荷物の準備、料理、西洋式のテーブルセッティングはみな「国際執事学院」分校の卒業試験科目だ。

ニューリッチの数はこれからも中国で増え、彼らの見栄として、バトラーの需要も高くなっていくだろう。もうマスコミの仕事を辞めて、年収3万ポンドのバトラーを目指して、成都に行こうかと思うが、今は1万900ポンドの学費は工面できないので困っている。

陳言 日本語日刊紙『速読中国』編集長。

連絡先: chenyan@seapush.com

微信: understandChina